草庵風茶室・露地にみる空間の質の変化
ーボリューム、構成要素の関係からー

宇野研究室　　4108074　中川　那由多

1. 研究背景と目的

今日の室内の照明は、書を読むとか、字を書くとか、針を 運ぶとか云うことは最早問題でなく、専ら四隅の蔭を消すことに費されるようになった。谷崎潤一郎の「陰翳礼賛」にもあるように、現在は、照明や構造の技術が進歩し、効率が 優先された明るく均質な建築、空間が創造されている。しかし 、多雨な気候で大きな屋根の下の暗い場所で文化が育ってきた日本では 、現在の均一な空間下では本来の魅力を失っていると言える。日本特有の建築はいくつか上げられるが、その中でも草庵風茶室 は日本の文化を良く表していて、茶の湯という一つの目的に特化した好例である。現在失われてしまった茶の湯の精神性を知るために、茶室及び露地の設計意図を研究する。

2. 研究対象

2011 年 9 月～10 月にかけて 31 事例を現地調査し、その中で蹲[註1)]、腰掛け、中門など露地の基本的な要素が配置され、茶室まで直線的な経路ではなく、段階的に茶の席に向けて心の準備を整えることが意図された露地及び茶室７事例を研究対象とする。

3. 研究方法

茶室・露地の構成要素が空間の質[註2)] に及ぼす影響を次の通り分析する。

3-1. 構成要素及び構成に影響を与える要素の分類

茶室・露地の構成に影響を与える年代、好み[註3)]、形式別に対象を分類する。また、茶室・露地の構成要素を分類し、事例に対する有無を調べる。灯籠、蹲は動線近くにあるものに限りカウントする。（表 1）

3-2. 空間の質の変化の分析

既往研究では茶室・露地を平面図など二次元の情報から分析しているものがほとんどだが、平面的な図面から受ける情報と実際の構成には大きな差がある。そのため、本研究では、アイソメ図を作成し、実物の状態に近い市やボリュームを抽出し分析する。

1) 境界の設定：茶の湯の動作と照らし合わせ動線を選定。その内、動作や場所による空間の変化するポイントを境界と定める。境界が多くある場合、入口と茶室前の他、特に空間の変化が大きいと感じられるもの２つを選定する。茶室内部においては、躙口から入るときと客座でお茶を飲むときを境界の代表として採用する。(図 1)

2) 視野ボリューム抽出 : 境界から進行方向に、人間が空間から影響を受ける範囲のとされる、俯角 50°、仰角 35°、左右それぞれ 50°の範囲の視野について市やボリュームを抽出する。（図２）その際、視界を遮らない樹木に関しては考慮しないものとする。

3) 分類：抽出された空間の形、視野ボリューム、ディテール[註4)] との位置関係、閉塞感について類型化する。

4. 要素分類の分析結果

分析の結果、以下の６つのことが明らかになった。

1) 貴人口[註5)] がある事例の露地ではあまり入り組んだ動線をとることがなく、草庵風の中では明解な造りで、露地からも貴人を対象としていることがうかがえる。

2) 中門で外露地と内露地とに分かれている事例ほど変化が大きくなる。また、灯籠と蹲は外露地よりも内露地に多く見られた。空間に変化を与える要素を内露地に配置することで、日常から非日常への変化が強調されている。

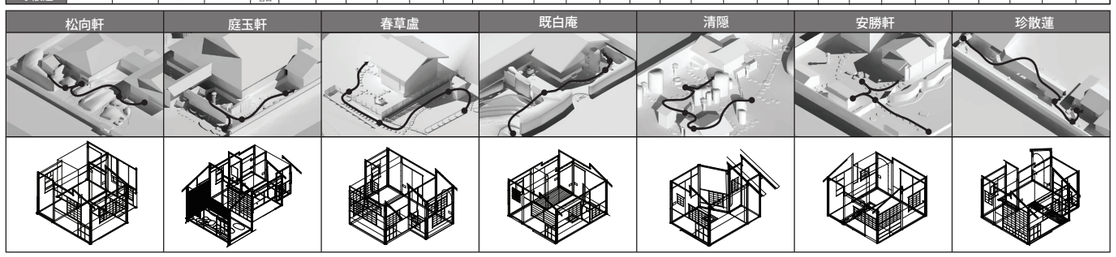
3) 突上窓[註6)] がなく内部が暗い茶室は露地も落ち着いたものになっており、茶室と露地のつながりが見て取れる。

4) 突上窓がある茶室では風呂先窓、床窓もある例がよくみられた。突上窓は内部の一部の明るさを上げる意図でつけられるが、同様の目的で風呂先窓[註7)]、床窓[註8)] もつけることで一層明るさのメリハリが生まれている。

5) 三畳台目以上の比較的広く単調になりやすい茶室では亭主床[註9)] や風呂先床[註10)] にし、空間に変化を与えている。

▼表１　茶室・露地の要素

茶室名＼要素	場所	年代	好み	形式	間取り	台目畳	相伴席	床	二重	中門	灯籠	蹲	外腰掛	内腰掛	躙口	貴人口	通口	給仕口	茶道口	落天井	化粧屋根裏天井	駆込天井	中柱	連子窓	色窓	突上窓	下地窓	風呂先窓	床窓	板敷き	腰張
松向軒	大徳寺	1628 年	細川三斎	草庵式	二畳台目	○		下座床	○	○	1/1	1/0	○		○		○		○	○		○	○	○			○	○			○
庭玉軒	大徳寺	江戸時代初期	金森宗和	草庵式	二畳台目	○		下座床			2	3				○	○			○	○	○	○	○	○		○				○
春草盧	三渓園	江戸時代初期	織田有楽	草庵式	三畳台目	○		亭主床	○	○	0/2	0/2	○		○			○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		○
既白軒	妙心寺	1631 年	藤村庸軒	草庵式	三畳			下座床	○	○	2/1	1/1			○		○		○	○		○	○	○		○	○	○	○		○
清隠	もてなしの文化美術館	1837 年	清隠斎	草庵式	一畳台目	○		上座床	○	○	1/4	1/1	○		○				○			○		○		○	○	○	○	○	○
安勝軒	大徳寺	1928 年	千宗左	草庵式	三畳台目	○		風呂先床	○	○	0/1	0/1		○	○	○	○		○	○	○			○			○			○	○
珍散蓮	四君子苑	1944 年	北村捨次郎	草庵式	二畳台目	○	○	下座床	○	○	3/1	0/1			○	○			○	○				○			○	○	○	○	○



▲図１　茶室・露地と境界

5. 空間の質の分析結果（表４）

5-1. 形

ｉ）露地：露地の視野ボリュームの中で左右前上の面が障害物で閉じている分類し、閉じている面でも一部抜けている、片側抜けているかで分類することができた（図３）。

・閉じている面は同一事例内で一環して閉じているものが多く見られた。これにより変化は少なくなるが、一定の安定感が生まれていると考えられる。

・閉じている面でも一部抜けていたり、半分抜けている形のものがある。抜けの部分があることにより、その先の期待感をもたせている。抜けの形を持つものが、動線の前半に多く見られるのはこのためと考えられる。

ii) 茶室：落天井、床が正面に入るかに大きく影響される。

・躙口からでは、全ての事例で床、落天井どちらかが正面にきていた。客座で向きが変わらない場合、形が大きく変わることはないが、向きが変わる場合、形の変化は多様でそれぞれの茶室の設計意図が表れている。

5-2. 視野ボリューム註 12)

ｉ) 露地：茶室前のボリュームはどの事例も小さくなった。全体の変化として動線前半より後半を小さくして茶室の極小空間に自然な流れで入るためであると考えられる。

ii）茶室：間取りに差があるものの、抽出された視野ボリュームでは大きな差は生じなかった。三畳台目では客座から点前座の距離が二畳台目と変わらないためである。

5-3. 閉塞感

ｉ）露地:閉塞感は空間の形と視野ボリュームに左右され、形の略称（図３）と組み合わせて閉塞感を分類する。

・abc が含まれる空間で視野ボリュームが大きい事例は少ないことがわかった。d を含むと視野ボリュームが小さくなりそうだが、小さいものは多くなく、上面が閉じている空間は必ずしも意図的に配置されていない。

ii）茶室：窓面積[註12)] と窓の位置が正面か側面かで仕分けた（図３）。床、落天井の位置と組み合わせて分類する。

・A’ B-3’ が多く見られた。一番暗くなる床を側面に置くことで閉塞感を抑えつつも、一定の緊迫感が出ている。

5-4. ディテールとの位置関係

ｉ）露地:灯籠や蹲は空間に変化を与える要素の一である。

・灯籠、蹲隅は空間の陰になっている部分にあることが多い。一部抜けのある形で、抜けの先に灯籠配置されているものが見られ、景色として意図して配置されている。

ii）茶室：中柱、窓、炉の位置関係について分析する。

・中柱、炉は入隅に配置されているものが多く、空間の変化と中柱を際立たせている。

・客座では、窓の面積が小さく、光量の少ない下地窓しか見えない場合が多く落ち着いた印象のものとなって、亭主の存在を邪魔しない構成になっていると言える。

6. 構成要素との関係

・貴人を対象とした構成の事例では、空間の変化は少なく、対象人物に対応した設計をしている。

・間取りの差では形に影響しにくいが、床の形式が亭主床や風呂先床など特徴的だと、空間の変化が大きくなる。

・板敷きがある茶室では躙口と客座の空間の差が見て取れ、板敷きで変化を出そうという意図が良く表れている。

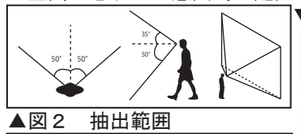
7. 結論

・事例ごとに印象は変わるものの露地から茶室までの一連の流れは一貫していて、対象人物により広く明るくしたり、暗く狭くするなど、意図的に空間を操作している。

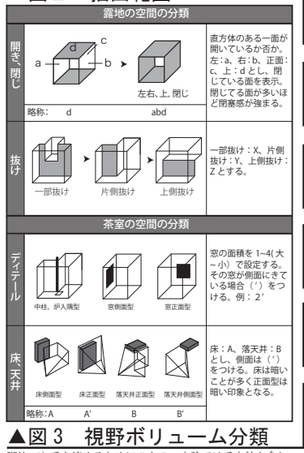
・せまい空間を効果的に配置することが重要で、広さ、使いやすさよりも演出したい空間を作ることを優先する。

・ディテールの位置が緻密に設計されており、空間の質を左右する。

以上より、茶室・露地で体感する空間は、現在では失われたゆったりした精神のもとで造られている。

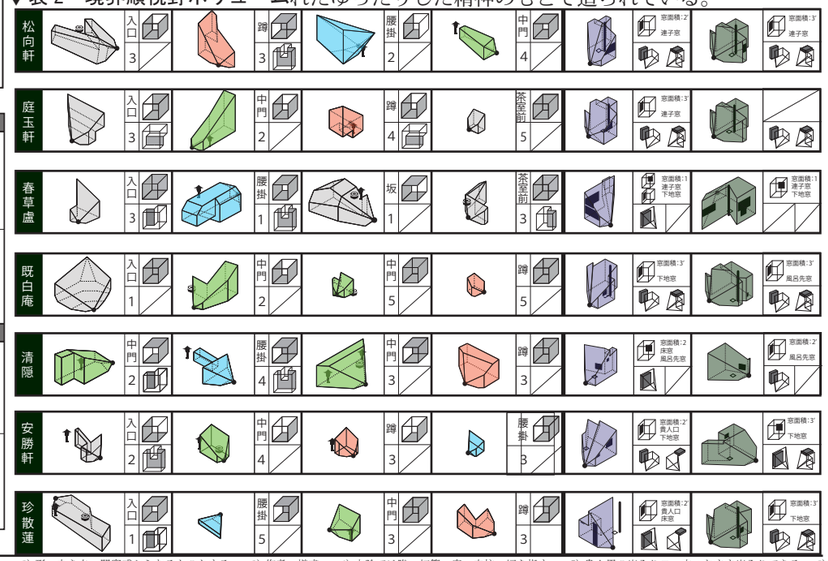


▲図２　抽出範囲



▲図３　視野ボリューム分類

▼表２　境界順視野ボリュー



脚注 :1) 手を清めるためにのもの。本論では手水鉢も含む。　2) 形、大きさ、閉塞感からなるものとする。　3) 作者、様式。　4) 本論では蹲、灯籠、窓、中柱、炉を指す。　5) 貴人用の出入り口。立ったまま出入りできる。 6) 化粧屋根裏に切り開けた天窓。　7) 点前座の風炉先に開けられた下地窓 。　8) 床の間の脇に設けられた窓。　9) 点前座の勝手付に床の間を設けたもの。　10) 点前座の上座に、床を並べて設けたもの。　11) 土壁の一部を塗り残して、下地の小舞と呼ばれる格子状に組んだ竹を見せた窓。　12) 大きい順に 1~5 で設定する。　13) 大きいからなしを 1~4 で設定する。

参考文献：文献 1: 北尾治春道「茶室の展開図 Interior Elevations of Tea Room」1974　光村推古書院　文献 2:「決定版　お茶の心　茶室と露地」1979　世界文化社　文献 3: 篠原修「景観用語事典」1997　彰国社　文献 4: 稲次敏郎「庭園倶楽部－日本庭園の「ありやうを」を求めて」1995　　文献 5: 堀口捨己「草庭－建物と茶の湯の研究」1968　　筑摩書房　文献 6：石井幹子「新・陰翳礼賛－美しい「あかり」を求めて－」 2008　祥伝社　文献：谷崎潤一郎「陰翳礼賛」（改版）1995　中央公論社　文献 7：桐浴 邦夫「世界で一番やさしい茶室設計 －１１０の qz キーワードで学ぶ－ 」2011　エクスナレッジ